The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	時制の照応再考
Author(s)	富永, 英夫
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1985, 19, p. 3-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47769
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

時制の照応再考

冨　永　英　夫

1．はじめに

本論は、一般に時制の照応として扱われてきた言語現象を今一度見直し、その本質を明らかにしようとするものである。

時制の照応とは、通常複文の主節と従属節の動詞の時制が一致することをいうわけであるが、この現象は間接話法などでよく見られ、特に主節の動詞が過去時制のとき問題にされる。例えば、次のような直接話法で書かれた文(1)、(2)に対して、間接話法で書かれた文(3)、(4)を考えてみるとき、我々は間接話法の文では時制の照応が生じているという。

(1) He said, "I am happy."

(2) He said, "I saw her on Monday."

(3) He said that he *was* happy.

(4) He said that he *had seen* her on Monday.

これだけのことならば、時制の照応とは、主節の動詞が過去時制の場合、従属節の動詞も主節の時制にひかれて過去時制（あるいは過去完了時制）になることである、と言えば事足りるように思われるが、次の例文に見られるように、問題はもう少し複雑なようである。

(5) Our teacher *taught* us yesterday that Columbus *discovered* America in 1492.

この文は、主節と従属節の時制が一致しているにもかかわらず、従属節が

歴史上の事実を表わすという理由で、時制の照応が行なわれていない場合とされる。また、次の(6)のような文も、'ago' という直示的な副詞が使われていることからわかるように、時制の照応が行なわれているとは見なされない。その下の時制の照応が行なわれている(7)の文と比べるとそのことは一層はっきりする。

(6) Tom said yesterday that Mary *left* three days *ago*.

(7) Tom said yesterday that Mary *had left* three days *before*.

以上から、時制の照応という現象は、主節の動詞の時制が過去ならば従属節の動詞の時制も過去になるというような単純なものではないことは明白である。

以下、第2節では、Huddleston (1969) の時制のとらえ方を参考にして時制の定義を行い、英語における可能な時制体系を考える。第3節では、その体系に合うように Reichenbach (1947) で提案された SRE 理論を修正する。第4節では、それまでの議論を踏まえ、英語における時制の照応を考察する。

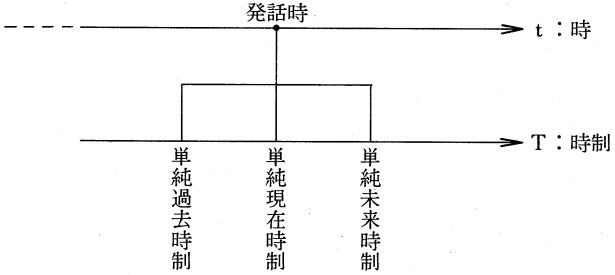
なお、時制の照応は一般的な現象であり、本来ならば関係節や副詞節を含む文、さらには談話における場合も考えなければならないが、ここでは、接続詞 that で導かれた名詞節を含んだ複文に焦点を当てることにする。また、先程も述べたように、時制の照応という現象は主節が過去時制のときに問題となるので、ここでも原則として、主節が過去時制のものを扱うことにする。

2．時制体系

時制とは、話者とある事柄、そしてある事柄同士の時間的関係を言語化する際に用いる文法範疇の1つである。一般には、ある時点を基準点として、ある出来事がそれ以前、それと同時、あるいはそれ以後のいずれに起

るかによって3つに区分される。そして、英語では2種類の基準点があり、従って2系統の時制が存在する。第一のものは、話者がある文を発する時点、すなわち発話時を基準点とした時制である。この場合、出来事が起る時点を“出来事時”と呼ぶことにすると、出来事時が発話時以前のときは過去時制、発話時と同時のときは現在時制、発話時以後のときは未来時制[1]になる。この話者中心的な時制は、発話時に直接関係し、また最も基本的なものなので、直示的時制(Deictic Tense)[2]、あるいは一次的時制(Primary Tense)[3]と呼ぶことができる。このことを図示すると次のようになる。

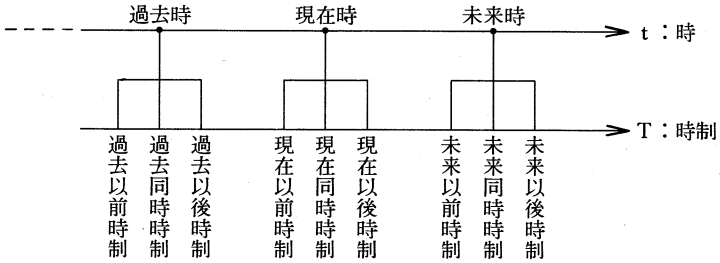
(8)



しかし、英語の場合、上記の発話時を基準点とした時制に加えて、話者がその第一の時制によって示した時点を新たな基準点とした時制も存在するように思われる。この新しい基準点を、発話時と区別するために、話者が言及した時点、すなわち“言及時”と呼ぶことにすれば、この言及時を基準点とした第二の時制が存在するということである。そして、この言及時は、今述べたように、第一の時制によって決定されるのであるから、過去時、現在時、未来時の3つの可能性があり、第一の時制の場合と全く同様に、それぞれに対して3つの時制が考えられるから、結局、合計3×3=9通りの時制が存在しうることになる。この時制はいわゆる複合時制のことであるが、発話時とは間接的にしか関係せず、二次的なものであるので、非直示的時制(Non-deictic Tense)、あるいは二次的時制(Secondary Tense)と呼ぶことができる[4]。以上のことをまとめ、9つの時制を命名してみると

次のようになる。

(9)



理屈の上では、三次的時制、四次的時制、…と考えることは可能なのであるが、英語の場合、そのような時制は存在しないようである。その理由は今のところ明らかではないが、おそらく、ある文の談話内での時間的位置を決定するには、その直前（あるいは直後）の文との関係がわかれば十分だからであろう。

最後に、時制の担い手は何であるかという問題についてであるが、英語の場合、形態的に見れば中核的な役割を果たすのは、他の多くの言語と同様動詞である。しかし、動詞だけが時制を決定しているとは言い難く、動詞が同じ形をしていても、違った副詞類が付加されることで時制が異なることもあるので、機能的に見れば、ある時は動詞句レベル、またある時は文レベルで時制を考えることが必要であろう。

以上、英語の時制体系について考察してみた。抽象的な議論が多かったため、わかりにくい点があったと思われるが、この節で主張したかったことをまとめると次のようになる。時制とは、話者が、ある出来事を言語化する時に用いる文法範疇であり、ある基準時点の前後・同時関係で区別される。英語の場合、基準時点には発話時と言及時の２種類あり、発話時を基準にしたものを直示的時制（計３時制）、言及時を基準にしたものを非直示的時制（計９時制）と呼び、最大限合計12種類の時制を考えれば十分である。

次節では、この節で述べた時制観に立脚した時制理論であるSRE理論を展開したい。

3．SRE理論

SRE理論とは、Reichenbach (1947)[5]で提唱され、その後、数々の学者によって修正された時制理論の総称である。本論で提示するものもその1つであるが、どの理論も何らかの形で以下に述べるS、R、Eの3つの点の関係で時制を記述しているところからSRE理論と呼ばれる。S、R、Eとは、それぞれ、前節で述べた発話時に相当するSpeech Time（以下S）、言及時に相当するReference Time（以下R）、そして出来事時に相当するEvent Time（以下E）の略で、それらの関係をダッシュ（——）とコンマ（，）を使って表わし、時制を体系化しようとしたところに特徴がある。このとき、ダッシュは時間の先行性、すなわちその左にある記号が指し示す時点はその右にある記号が指し示す時点より先行していることを表わし、コンマは同時性、すなわちそれによって隔てられている記号が指し示す時点は同時であることを表わす。

例えば、MaryとTomは恋人同士で、いつもの駅の伝言板の前で3時に待ち合わせをしている状況を考えてみる。Tomは約束の時間の3時より10分遅れてその場所に到着したが、Maryの姿はなく、伝言板に「時間にルーズな人は嫌いです。さようなら。」とだけ書かれてあったとする。もし、このことをTomが後になって誰かに言うとすると、おそらく彼は次のように言うだろう。

(10) Mary had left the station at 3:10.[6]
（メアリーは3時10分にはすでに駅を立ち去っていた。）

これをSRE表示すると次のようになる。

(11)　E ―――― R ―――― S
　　↑　　↑　　↑
　立ち去ったとき　3:10　発話時

ところが、もし、Mary が几張面な人で、「さようなら。」の後に「3時」と書いてあったとする。もちろん、この場合でも Mary が3時10分に立ち去っていたことには違いないから、(10)のように言うことも可能であるが、Tom が自分が到着した時刻（3時10分）を意識せずに、Mary が立ち去った時刻を問題にするならば、彼は次のように言うだろう。

(12)　Mary left the station at 3:00.

これを SRE 表示すると、Tom は自分が到着した時刻（3時10分）は意識せず、Mary が立ち去った時刻だけを問題としているのだから、次のようになる。

(13)　E ―――― S
　　↑　　↑
　立ち去った時　発話時

これと同じ要領で、前節で見た12の時制のＳＲＥ表示を考えてみると以下のようになる。

まず、直示的時制は、発話時と出来事時だけが問題となるから、(8)は(14)のようになる。なお、その下の例文は典型的なものを選んである。

(14)　単純過去時制：E ―――― S
　　(He saw her.)
　　単純現在時制：S，E
　　(He sees her.)
　　単純未来時制：S ―――― E
　　(He will see her.)

このとき、(8)の時制の数と(14)のSE表示の数は一致しているが、これは理論上必然的な結果である。説明をわかりやすくするために、(15)で考えてみる。

(15) ◯ ▭ ◯

直示的時制の場合は、上の2つの◯の中にSとEがそれぞれ入り、▭の中に——または，が入るわけであるから、その場合の数は2×2＝4通りである。ところが、，が▭に入ったときは、S，Eであっても、E，Sであっても同じことなので、4から1をひくと3通りになる。ここでは、S，Eを代表させておく。

次に、非直示的時制の場合であるが、今度は発話時と出来事時に加えて言及時も関係してくるので、(9)の時制は(16)のように表わしうる。

(16) 過去以前時制：E——R——S

(He had seen her.)

過去同時時制：E，R——S

(He saw her.)

過去以後時制：
- R——E——S
- R——S，E
- R——S——E

(He {would / was going to} see her.)

現在以前時制：E——S，R

(He has seen her.)

現在同時時制：S，R，E

(He sees her.)

現在以後時制：S，R——E(7)

(He {will / is going to} see her.)

未来以前時制：
```
        S ――― E ――― R
        S, E ― R
E ――― S ――― R
```
(He will have seen her.)

未来同時時制：S ――― R, E

(He will see her.)

未来以後時制：S ――― R ――― E

(He will be seeing her.)

(16)については、大きく分けて問題点が2つあるように思われる。1つは、(16)では13個のSRE表示が与えられているが、なぜ13なのかという点、もう1つは、過去以後時制と未来以前時制だけに3つのSRE表示が対応しているが、それはなぜかという点である。

非直示的時制の場合は、S、R、Eの関係を――と，で表わすわけであるから、次の○の中にS、R、Eが入り、▭の中に――と，が入るときの場合の数を考えればよい。

(17) ○ ▭ ○ ▭ ○

従って、可能な形式は、3×2×1×2×2＝24通りということになる。ところが、この場合も直示的時制と同様に、コンマで隔てられている記号の順序は考える必要がないので、数は24より少ないはずである。話をわかりやすくするために、場合分けをしてみると、(i)コンマが2つのときは、S、R、Eの順序は全く関係ないので、1通り、(ii)コンマが1つのときは、コンマで隔てられている2つの記号の順序は関係ないので、残りの1つが何であるかで決まり、可能性はS、R、Eの3通りであるが、コンマが入る場所が2つあるので、結局3×2＝6通り、(iii)コンマがないときは、3つの記号の順序を考えなければならないので、3×2×1＝6通り、従って(i)、(ii)、(iii)の場合の数を合計すると、13通りになる。

次に、過去以後時制と未来以前時制がそれぞれ違ったSRE表示を3つずつもっている点についてであるが、実は、この違いは区別をする必要がない違いなのである。つまり、Rを考慮する非直示的時制においては、SとRの関係及びRとEの関係が重要なのであって、SとEの関係はRを媒介として間接的に決定されるだけであり、直接的なつながりはないのである。(16)において、過去以後時制及び未来以前時制としてまとめである3つの形式のSとRの関係、RとEの関係は同じである。違うのは、SとEの関係であり、その違いは無視することができる。次の2つの例文で異種の副詞が共起しうるのは、まさにそのことを示している。

(18) He said he would see her $\left\{\begin{array}{l}\text{yesterday}\\ \text{now}\\ \text{tomorrow}\end{array}\right\}$.

(19) He will have seen her by $\left\{\begin{array}{l}\text{yesterday}\\ \text{now}\\ \text{tomorrow}\end{array}\right\}$.

従って、結局、過去以後時制も未来以前時制も1つずつのSRE表示が与えられていることになり、非直示的時制においても、時制の数とSRE表示の数が一致することとなる。

以上のように、SRE理論は、前節で示した時制形式の特徴及び数を過不足なく記述している。このことは、Hornstein (1981)[8]も指摘している通り、SRE理論の大きな利点の1つに他ならない。

この節で提示したSRE体系は、Reichenbach (1947)[9]で示された初期のSRE体系に一見似ている。しかし、両者は大変重要な点で異なっており、このことは単純時制にはRは必要ないというReichenbach批判とも関連する。Reichenbachは、前節で主張した直示的時制と非直示的時制を区別することなく、すべての時制をS、R、Eで表わそうとしたわけであるが、本来Rが必要ない直示的時制にまでRを持ち込んだところに彼の誤ちがあった。

従って、ここで大切なことは、直示的時制と非直示的時制を峻別し、それぞれに異なるSRE表示を与えることである。

次節では、この節で提示したSRE理論の枠組みで従来時制の照応として扱われてきた現象をとらえ直してみることにする。

4．時制の照応

第1節ですでに見たように、時制の照応の現象は、従来言われてきたように主節の動詞が過去時制のとき従属節の動詞も過去時制になると言うだけでは不十分なとらえ方である。

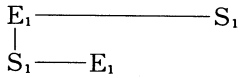
まず、次の3つの例文を比べてみる。

(20) Tom said a week ago, "Mary will leave in two days."

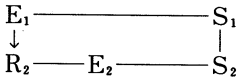
(21) Tom said a week ago that Mary will leave in two days.

(22) Tom said a week ago that Mary would leave in two days.

(20)は直接話法の例、(21)は間接話法で時制の照応が守られていない例、(22)は間接話法で時制の照応が守られている例である。これらの文はどれも2つの節から成立しており、2つの時制が関係してくるのでSRE表示は次のようになる。(1は主節、2は従属節を表わす。)

(20′)


(21′)

(22′)


(20)は直接話法であり、引用部分が発話された時点は1週間前のことである

ので、(20′)ではE_1の下にS_1がある。この場合は、2つの節の発話者は異なり、主従関係もない。(21)と(22)は間接話法であり、2つの節の発話時は一致しているので、(21′)と(22′)ではS_1の下にS_2がある。ここで特に注目したいのは(22)の場合であるが、この(22)が他の2つと違うところは従属節が非直示的時制であり、(22′)においてR_2がE_1に一致している点である。[10] 従って、1つの仮定として、時制の照応とは次のようなものであるとしてみよう。

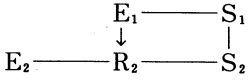
(23) 主節の時制のEが従属節の時制のRを決定すること。[11]

このことを確めてみるために、次のような文を考えてみる。

(24) Mary said that she had eaten the cake.

この文の主節は単純過去時制であり、従属節は過去以前時制であるので、そのSRE表示は以下の通りである。

(24′)

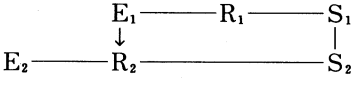


この場合も主節の時制のEが従属節の時制のR を決定しており、(24′)は(23)に合致する。

また、次のような主節が過去以前時制の場合でも(23)は守られている。

(25) Tom had said that he had believed her.

(25′)



最後に、Hornstein (1981) があげている次のような文を考えてみる。

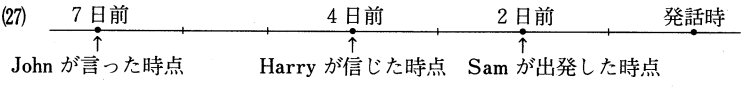
(26) John said a week ago …(a)

that Harry would believe in three days …(b)

that Sam would leave for London in two days. …(c)

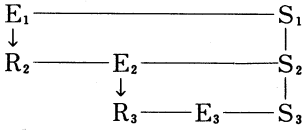
この文の時の解釈は、(a) John が言ったのは発話時から 1 週間前、(b) Harry が信じたのは John が言った時点から 3 日後（発話時からは 4 日前）、(c) Sam が出発したのは Harry が信じた時点から 2 日後（発話時からは 2 日前）である。これを図示すると(27)のようになる。

(27)



従って、(26)の SRE 表示は次のようになる。

(26′)



この複雑な文においても主節の時制の E が従属節の時制の R を決定しており、(23)の仮定は正しいと結論づけることができよう。

ここで大事なことは、E はその直後の R を決定するということである。つまり、(26′) において E_1 は R_2 を、E_2 は R_3 を決定するのであり、決して E_1 が R_2 を越えて R_3 を決定することはないのである。このことは、Sam が出発した時点は Harry が信じた時点から 2 日後なのであって、決して John が言った時点からではないことを適確に表現している。

以上のことを考慮して、時制の照応という現象を一般的に記述すると次のようになる。

(28) $E_n \longrightarrow R_{n+1}$

（n は自然数、→ は「決定する」と読む。）

5．結　び

本論の要旨をまとめると次のようになる。

時制の照応を考える際には、ＳとＥの関係で表示される直示的時制及びＳとＲとＥの関係で表示される非直示的時制を峻別することが重要であり、時制の照応とは、従属節が非直示的時制であり、しかもそのＲが主節のＥによって決定される現象であると言える。換言すると、時制の照応とは、従属節が統語的にもまた時制的にも主節の影響下にあり、従属節の時制の基準点が主節の時制によって示されている場合である。

このように考えると、従来時制の照応の例外として扱われてきたものは、以下に示す通り、従属節が直示的時制であり、統語的には主節の影響下にあるが、時制的には独立している場合であることがわかる。(31)は(5)と同じ。)

(29)　Columbus proved that the earth is round.

(29′)　E_1 ——— S_1
　　|
　　S_2, E_2

(30)　He told me this morning that he will go with us tomorrow.

(30′)　E_1 ——— S_1
　　|
　　S_2 ——— E_2

(31)　Our teacher taught us yesterday that Columbus discovered America in 1492.

(31′)　E_1 ——— S_1
　　|
E_2 ——— S_2

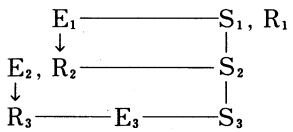
最後に、時制の照応を(23)のように考えれば次のような複雑な文もその一例であることになる。

(32)　Some reformers have told us that initially they worried that dif-

ferences would emerge between rich and poor.

(*Newsweek*, April 15, 1985)

(32′)



以上、英語における時制の照応を修正SRE理論の枠組みで考察してみた。すでに述べたように、本論で扱ったものは時制の照応の現象の一部にすぎず、その他にも関係節や副詞節を含んだ文、さらには談話レベルでも同じような現象が見られるが、それらについては今後の研究課題としたい。

注

(1) 英語において、未来時制を認めるかどうかは議論の分かれるところである。たしかに、形態的には未来時制は必要なく、過去時制と非過去時制の2つで十分かもしれないが、ここでは機能的な面も考慮に入れ、未来時制も認める立場をとることにする。

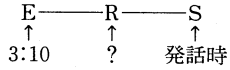
(2) ここのdeictic tense及び後に出てくるnon-deictic tenseはHuddleston (1969)の用語。

(3) ここのprimary tense及び後に出てくるsecondary tenseはSweet (1892)の用語。ただし、ここではSweetと違う使い方をしている。

(4) 筆者は時制を拡大解釈する立場をとっている。厳格な時制論者ならば、時制としては発話時を基準点とした直示的時制だけを認め、ここで言う非直示的時制は相として扱うであろう。従って本論では、進行形と完了形の用法のうち継続を表わす用法のみを相と見なし別扱いにするが、その他の用法は時制として扱う。

(5) Reichehbach (1947), pp.287-298.

(6) 厳密に言えば、この文は2通りに曖昧である。ここで取り上げた意味の他に、3時10分に駅を立ち去った、という意味もある。それは、何時何分とは明示されてはいないけれどもRが意識されている場合で、そのSRE表示は次のようになる。



(7) 現在以後時制 (S, R—E) と未来同時時制 (S—R, E) には同じ例文 (He will

see her.) が与えられているが、これは筆者が助動詞 will に現在の判断を基にした予想を表わす用法と純粋に未来時の出来事を表わす用法の 2 つを認めていることを示す。

歴史的に見て、'will' はもともと発話時における話者の意志を表わす動詞であったが、その後、その意味が弱まり助動詞化して未来時における出来事を表わす用法を発達させた。この歴史的変遷を SRE 表示で表わしてみると次のようになる。

S, R, E ⟶ S, R —— E ⟶ S —— R, E

(8) Hornstein (1981, p.130) に次のような記述がある。

"In a Reichenbachian theory, tense is a configuration of SRE elements structured by linearity and associativity. The total number of possible combinations yielded by these two operations is twenty-four. Thus, a Reichenbachian system, one can say, provides a fairly limited number of possible tenses for natural languages to choose from."

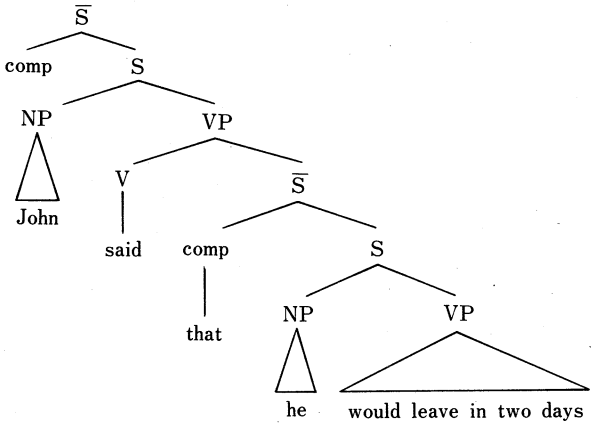
(9) Reichenbach (1947), p.297.

(10) Allen (1966, p.79) にも同様の指摘がある。彼は、Reichenbach の "the permanence of the reference point" という原則を批判する際に、そのことについて簡単に触れている。

(11) (23)は統語論的に厳密に書くと次のようになる。

名詞節を含む文においては、c-command している動詞の時制の E が c-command されている動詞の時制の R を決定する。(c-command の定義については、Reinhart (1976) を参照。)

例えば、(22)の樹形図が次のようであるとすると、'said' は 'would leave' を c-command している。



時制の照応と統語構造の関係についての詳しい議論は SMITH (1981) を参照。

参考文献

ALLEN, R.L.: *The Verb System of Present-day American English*, Mouton, 1966.

COSTA, R.: "Sequence of Tenses in that-clauses," in *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, Chicago Linguistic Society, 1972, pp.41-51.

JESPERSEN, O.: *The Philosophy of Grammar*, George Allen and Unwin, 1924.

————. : *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part Ⅳ, George Allen and Unwin, 1931.

HORNSTEIN, N.: "Towards a Theory of Tense," *Linguistic Inquiry*, Vol.8, 1977, pp. 521-558.

————.: "The Study of Meaning in Natural Language: Three Approaches to Tense," in N. Hornstein and D. Lightfoot, eds., *Explanation in Linguistics*, Longman, 1981, pp.116-151.

HUDDLESTON, R.D.: "Some Observation on Tense and Deixis in English," *Language*, Vol.45, 1969, pp.777-806.

OTA, A.: "Tense Correlations in English and Japanese," in J.E.Alatis, ed., *Studies in Honor of A.H.Marckwardt*, Teachers of English to Speakers of Other Languages, 1972. Also in *Studies in English Linguistics*, Vol.2, The Asahi Press, 1973, pp.108-121.

REICHENBACH, H.: *Elements of Symbolic Logic*, Macmillan, 1947.

REINHART, T.: *The Syntactic Domain of Anaphora*, Ph.D. dissertation, MIT, 1976.

SMITH, C.S.: "The Syntax and Interpretation of Temporal Expressions in English," *Linguistics and Philosophy*, Vol.2, 1978, pp.43-100.

————.: "Semantic and Syntactic Constraints on Temporal Interpretation," in P.Tedeschi and A.Zaenen, eds., *Syntax and Semantics, Vol.14: Tense and Aspect*, Academic Press, 1981, pp.213-237.

SWEET, H.: *A New English Grammar: Logical and Historical*, Part I, Oxford University Press, 1892.

VERKUYL, H.J. and J.A.Le Loux-Schuringa: "Once upon a Tense," *Linguistics and Philosophy*, Vol.8, 1985, pp.237-261.

(文学部助手)